

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月26日現在

機関番号：32626

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21320113

研究課題名（和文）言語政策史の国際比較に関する総合的研究

研究課題名（英文）International Comparative Studies of Language Policy History

## 研究代表者

原 聖 (HARA KIYOSHI)

女子美術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20180995

研究成果の概要（和文）：政府による施策ばかりでなく、民衆レベルの言語運動まで含める、広義に定義した言語政策史を、言語政策の先進地域である欧州と、それ以外の地域（とりわけアジア）とを、言語の様態を3つに分類した上で（国語民族語、交易語帝国言語、少数言語）比較した。政府の施策は重要だが、決定的ではなく、それ以外のレベル、たとえば民衆レベルでの積極的受け入れ、ないし働きかけこそ重要であることが判明した。

研究成果の概要（英文）：We compared broadly defined language policies, including not only governmental policies but also language movements on a popular level, between Europe, well developed regions of language policies and other regions, especially Asia, categorizing 3 types of languages: national and nationality languages, trade and imperial languages, and minority languages. What we have found is that governmental policies are important, but not decisive and that other factors like people's positive acceptance or encouragement are important.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2010年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	11,900,000	3,570,000	15,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、史学一般

キーワード：言語政策、言語史、比較社会史、比較歴史学、社会言語学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者を中心として、多言語社会研究会を組織し、これまで ①「多言語社会をめざす言語運動・言語政策に関する総合的研究」（基盤研究(B)、2001年-03年、課題番号 13410056、研究代表者、林正寛）、②「多言語社会生成の歴史的条件に関する総合的研究」（基盤研究(B)、2004年-06年、課題番号 16320082、研究代表者、原聖）、と2件の

科研費プロジェクトを行った。

(2) こうした研究のなかで今後の課題として浮上したのが、こうした多言語社会論に関わる問題を広義の言語政策史のなかに位置づけることであった。

## 2. 研究の目的

(1) 少数言語の言語運動なども言語政策に含める広義の言語政策を考えるなかで、その

歴史をおもに欧州とアジアで比較する。

(2) 言語政策というと近代だけを考えがちだが、できるだけ長い歴史的スパンで考える。

(3) 比較するなかで、言語政策の主要な要因を析出し、その上で、何が重要な要因かを分析する。

### 3. 研究の方法

(1) Bernard Spolsky (Language Policy, 2004), Teressa McCarty (Ethnography and Language Policy, 2011), Nancy Hornberger (The Ethnography of Language Policy, 2011) などによる言語政策および言語政策史の基本文献を検討し、これまでの科研による研究成果(多言語社会をめざす言語運動史・言語政策史、および多言語社会生成の歴史的条件)をつき合わせ、多言語社会論の理論面で分析の視角を広げる。

(2) ①国語民族語、②交易語帝国言語、③少数言語の3タイプに言語を分類し、それぞれについて、言語政策史を比較する。3タイプの言語の分類に際しては、1.(1)で挙げた2件の多言語社会研究プロジェクトの成果が重要であった。

(3) 研究代表者、研究分担者による、欧州、アフリカ、アジア、日本での個別調査に際しては、歴史的な比較研究を念頭におき、文献史料の発掘整備に重点をおいた。

(4) とりわけ東アジアに関するシンポジウムを開催することで、研究の蓄積が比較的少ない地域での研究を試み、同時にこの地域での研究者交流につなげる。

(5) 3タイプの言語の分析を総合化する公開シンポジウムを開催し、なおかつ、類似の研究(『歴史学研究』2010年11月号-2011年1月号)を比較し、分析の精度を高める。

### 4. 研究成果

(1) 理論面では、我々の研究と同じように、欧米でも言語政策を広義に考えることが主流になりつつあり、政府レベルばかりでなく、家庭内や個人の言語に対する働きかけも言語政策に含めて考えるようになってきている。また、アメリカ言語人類学の潮流に属する「言語政策の民族誌」研究は、これまでの、言語を権利として考えるばかりでなく、資源として考える方向性を打ち出している。これはユネスコの危機言語保存の理論的基盤ともなりうるものであり、今後有望な方向性である。

(2) 欧州の言語政策研究では、ピーター・バーク『近世ヨーロッパの言語と社会』(拙訳、2009年)、Tomasz Kamusella (The Politics of Language and Nationalism in Modern Central Europe, 2009)やJoshua A. Fishman (European Vernacular Literacy, 2010)など、歴史的に長いスパンでとらえるものも出てきており、我々の研究と軌を一にするものである。いわゆる「言語社会史」と規定できる

分野であり、言語研究では、今後ますます重要になるはずである。

(3) 本研究の3タイプへの言語分類は、『歴史学研究』(前掲号)の「言語というポリテイクス」という特集におけるその切り口と驚くほど類似するものであり、言語政策史の研究視角として妥当な方向性であると確信できた。

(4) 研究代表者による個別研究(ケルト諸語圏の言語政策)、また研究分担者による個別研究、すなわち、「インド人移民、亡命インド人の言語運動と言語政策」(藤井隆)、「近代沖縄の標準語励行政策」(近藤健一郎)、「ロシアおよび周辺諸国の言語法・言語政策」(渋谷謙次郎)、「ネパールの交易語と言語政策」(名和克郎)、「モーリタニアの交易語と言語政策」(砂野幸稔)、「オクシタン語の言語運動と言語政策」(佐野直子)、「パラグアイのグアラニー語と言語政策」(塚原信行)は、ほぼすべての研究で、言語運動を含める言語政策を話題にしており、公開討論会における言語政策史の比較においても、比較しやすい題材を提供することになった。

(5) 少数言語の言語政策についていえば、言語評議会という政策実施機関ばかりでなく、自主教育運動を含む教育、社会的使用を促す民間団体を含む援助機関、テレビや新聞での使用、また言語フェスティバルなどが重要な要因として浮上した。これからわかることは、政策実施機関による狭義の言語政策ばかりではなく、言語運動家などによる民衆レベルでの地道な活動も政策を担う重要な要因だということである。

(5) 中国、台湾、韓国の研究者を交えた東アジアレベルでの研究集会を開催することにより、東アジアにおける言語政策史研究の重要性を周知することが可能になった。①2009年12月13日、東京大学東洋文化研究所で行った「言語の存続とコミュニティ、アジアを中心に」と題するシンポジウムでは、孫宏開(中国社会科学院教授、以下敬称略)を招聘し、言語の基礎共同体である「コミュニティ」をターゲットとして、言語の存続をめぐる問題を具体的に検討しつつ、標準語形成や国語教育といった国語に関する諸問題、国内的な交易語や共用語に関する諸問題、さらに少数言語や消滅の危機に瀕した言語の諸問題という3レベルの問題系との接合を試みた。②2010年3月27日-28日に宮崎大学で行った科研合宿では、宮崎大学滞在中の蔡茂豊(台湾、東呉大学教授)に「戦後台湾の日本語教育」と題する講演を依頼し、台湾の近代の言語政策史を検討した。さらに沖縄(石原昌英琉球大学教授と近藤健一郎による報告)、日本(パトリック・ハイリッヒによる報告)、さらにネパール(名和克郎による報告)、ベルギー(石部尚登東京外国語大学研

究員による報告)、フランス(佐野直子による報告)を交え、言語政策史の国際比較の内実を深めた。③2011年7月30日-31日、東京大学東洋文化研究所で行ったシンポジウム「多言語状況の中での東アジア近代国家、言語問題にどう対処したか」には、中国から于錦恩(南京信息工程大学)、台湾から陳培豊(台湾中央研究院)を招聘した。于は「清朝期の多言語状況と国家」について、陳は「日本統治と漢字使用の諸相」について報告した。渡辺美季(神奈川大学)が「琉中関係のなかの中国語と日本語」と題して近世東アジアの中国、日本間の琉球の言語問題を論じた。また、清水康行(日本女子大学)が「江戸から明治へ、言語の公的使用について」、三ツ井崇(東京大学)が「朝鮮開化期の言語と国家」について報告し、近代国家移行期の日本と朝鮮について論じた。追加的に包聯群(東京大学)が「清朝末から民国書記にかけての言語政策、その研究動向」について報告した。パトリック・ハイリッヒ(獨協大学)、岩月純一(東京大学)、田中克彦(一橋大学名誉教授)、フフバートル(昭和女子大学)、藤井久美子(宮崎大学)、李守(昭和女子大学)によるコメント、総合討論での藤井毅(東京外国語大学)による論題提起も的確で、東アジアにおける、近代移行期の国家と言語の諸問題を浮かび上がらせることに成功した。日本では古い時代の政策に関わる研究も数多いが、アジアではまだこれからと言える。近代の黎明期(19世紀後半)についてシンポジウムを行うことができたのは、今後の研究を期待する上でも収穫であった。

(6) 南京大学に設置されている中国国立言語戦略研究センターとの連携は重要であり、同研究所所長の2度にわたる招聘講演は収穫の多いものであった。①2010年6月3日、東京大学東洋文化研究所にて「中国における社会言語学と言語政策の歴史」と題して講演を行った(『ことばと社会』別冊3号、2010年に掲載)。②2012年2月5日、東京大学東洋文化研究所にて、「中国における言語政策と言語復興」と題して講演を行った(科研報告書『言語政策史の国際比較に関する総合的研究』2012年、に掲載)。この分野における研究ばかりでなく、言語社会史全般での今後の連携研究が期待される。

(7) 研究代表者の専門領域、ケルト文化圏に関して、3度にわたり研究集会を開催した。①ケルト諸語の歴史と語源学を専門とするピエール＝イヴ・ランベール(フランス国立高等学術研究院第4部門教授)による講演(2009年10月15日、日仏会館、「ケルト学とは何か」、『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会機関誌)第14号、2011年に掲載。10月17日、大東文化大学、「ケルト言語学の過去と現在」、『ケルト諸語文化の復興』

2012年、掲載)。これは、言語政策史研究を古代にまで展望を広げる機会となった。②初期中世アイルランド文献学の専門家ヒルデガルト・トリストラム(フライブルク大学名誉教授)による講演会(2010年10月9日、西南学院大学、「初期アイルランド文学における口承伝統と書きことば」、10月14日)。欧州において俗語の書記言語の成立がもっとも早い地域のひとつアイルランドにおける国語の問題を論じ、言語政策史、とりわけ国語標準語の問題の長期的展望を見通すことになった。③鹿児島大学の招聘により実現したケルト諸語文化圏の言語復興運動家5人の招聘の折、2011年1月31日-2月1日、東京日仏会館において、「ケルト諸語文化の復興、その文化的多様性の意義を探る」シンポジウムを開催した。ブルターニュ、ウェールズ、コーンウォール、アイルランド、スコットランドと5地域の言語復興の現状とその歴史について報告してもらった。言語運動に携わる運動家たちの報告を直積聞く機会がなかったないので、たいへん貴重なシンポジウムであり、報告書にまとめることができたのは大きな収穫であった(報告書『ケルト諸語文化の復興』2012年、女子美術大学)。

(8) 2011年12月3日、東京大学東洋文化研究所にて、科研の公開討論会を開催した。研究分担者の藤井毅(インド)、近藤健一郎(沖縄)、渋谷謙次郎(ロシア)、名和克郎(ネパール)、佐野直子(フランス)、塚原信行(パラグアイ)の個別研究報告と、連携研究者である岩月純一、藤井久美子、山下仁、パトリック・ハイリッヒ、小森宏美によるコメント、研究代表者である原聖による総合的報告を行った。特に国語標準語に関して充実した討論が行われた。この折に、アフリカにおける公共空間の未成熟と公的言語の未発達結びついているという問題が提起された。これは国際比較の困難さを指摘するものだが、言語政策を民衆レベルの言語運動まで含めて考えれば、ほかの地域との比較は十分可能であり、この討論会は比較が主に欧州とアジアに力点が置かれていた状況を改善する上で重要であった。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

- ① 原聖、ケルト諸語文化の復興、その文化的多様性の意義を探る、ことばと社会、査読有、別冊4、2012、5-43
- ② HARA Kiyoshi, Comparing Language Policies and the Revitalization Process of Celtic Languages at the Beginning of 21<sup>st</sup> Century, Celtic Forum (The Annual

Reports of Japan Society for Celtic Studies), 査読有、No. 14 (2011), pp. 15-20.

- ③ 近藤健一郎、1930年代中葉の沖縄における標準語教育・励行政策とその実態、ことばと社会、査読有、第13号、2011、148-171
- ④ 渡邊日日・木村護郎クリストフ、学校教育における少数派言語への視座、ことばと社会、査読有、第13号、2011、4-29
- ⑤ 藤井毅、言語問題において「進歩的」であるということ：ヒンドウスターニー語という難問、歴史学研究、査読有、第873号、2010、25-36、80
- ⑥ 塚原信行、母語維持をめぐる認識と実践、ことばと社会、査読有、第12号、2010、48-77
- ⑦ 原聖、言語的多様性という視座、ことばと社会、査読有、別冊3、2010、5-14
- ⑧ パトリック・ハインリッヒ、危機言語の維持に必要な社会的条件、ことばと社会、査読有、別冊3、2010、34-46
- ⑨ 原聖、ブルターニュに生きるケルト文化、季刊民族学、査読無、第133号、2010、81-92
- ⑩ 原聖、全世界的潮流としての多言語主義、多元文化交流（台湾・東海大学日本語文化系）、査読無、創刊号、2009、5-23

[学会発表] (計4件)

- ① 原聖、言語政策史国際比較研究の意義、2000年代ケルト諸語圏の言語政策、藤井毅、インド系移民・亡命インド人の言語運動と言語政策、近藤健一郎、近代沖縄の標準語励行政策、渋谷謙次郎、ロシアおよび周辺諸国の言語法・言語政策、名和克郎、ネパールの交易語と言語政策、砂野幸稔、モータニアの交易語と言語政策、佐野直子、オクシタン語の言語運動と言語政策、塚原信行、パラグアイのグアラニー語と言語政策、科研「言語政策史の国際比較研究」公開討論会（東京大学東洋文化研究所）、2011年12月3日
- ② 原聖、言語的多様性という視座、多言語社会研究会第6回研究大会（京都大学）、2010年12月4日
- ③ HARA Kiyoshi, Japanese Sociolinguistics, Past, Present and Future, 中国国立言語戦略研究センター（中国・南京大学）、2010年10月26日
- ④ 原聖、ケルト諸語の再活性化の現状について、日本ケルト学会東京研究会（慶応大学）、2009年7月18日

[図書] (計7件)

- ① 原聖、藤井毅、近藤健一郎、砂野幸稔、名和克郎、佐野直子、小森宏美、他、女子美術大学、言語政策史の国際比較に関する総合的研究、2012、87

- ② 砂野幸稔、佐野直子、塚原信行、原聖、渋谷謙次郎、渡邊日日、藤井毅、名和克郎、山下仁、他、三元社、多言語主義再考、2012、755

- ③ Patrick HEINRICH, et al., Language Life in Japan, Routledge, 2011, 252

- ④ パトリック＝ハインリッヒ、原聖、他、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、琉球諸語記録保存の基礎、2011、221

- ⑤ パトリック・ハインリッヒ、他、三元社、東アジアにおける言語復興、2010、269

- ⑥ 松井健、名和克郎、野林厚志編、昭和堂、グローバル化と〈生きる世界〉、生業からみる人類学的現在、2011、493

- ⑦ 小森宏美、他、関西大学出版部、差異と共同、「マイノリティ」という視角、2011、460

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原聖 (HARA KIYOSHI)  
女子美術大学・芸術学部・教授  
研究者番号：20180995

### (2) 研究分担者

藤井毅 (HUII TAKESHI)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号：20199285  
渋谷謙次郎 (SHIBUYA KENJIRO)  
神戸大学・大学院法学研究科・教授  
研究者番号：50346277  
近藤健一郎 (KONDO KEN' ICHIRO)  
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授  
研究者番号：80291582  
塚原信行 (TUKAHARA NOBUYUKI)  
京都大学・高等教育研究開発推進機構・准教授  
研究者番号：20405153  
佐野直子 (SANO NAOKO)  
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授  
研究者番号：30326160  
砂野幸稔 (SUNANO YUKITOSHI)  
熊本県立大学・文学部・教授  
研究者番号：60187797  
林正寛 (HAYASHI MASAHIRO)  
女子美術大学・芸術学部・教授  
研究者番号：30164966  
名和克郎 (NAWA KATSURO)  
東京大学・東洋文化研究所・准教授  
研究者番号：30323637

### (3) 連携研究者

岩月 純一 (IWATSUKI JUN' ICHI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：80313162  
藤井 久美子 (HJIII KUMIKO)  
宮崎大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：60304044  
山下 仁 (YAMASHITA HITOSHI)  
大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授  
研究者番号：70243128  
渡邊 日日 (WATANABE HIBI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・専任講師  
研究者番号：60345064  
小森 宏美 (KOMORI HIROMI)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授  
研究者番号：50353454  
パトリック・ハインリッヒ (PATRICK HEINRICH)  
獨協大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：70584655